

生きてるだけで価値がある

松田陽子

自己紹介

みなさん、こんにちは。私はシンガーソングライター、そして、京都光華女子大学の客員教授もさせていただいています。松田陽子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

簡単に私のプロフィールを紹介させていただきます。「Self」と書いている今日の資料があるんですけども、そちらをペロンとまずはじめに見ていただきたいと思えます。開いていただきますと一番上の右に「NPO法人 Self代表 松田陽子」とありまして、シンガーソングライター、国連UNHCR広報委員、そして京都光華女子大学客員教授と書かせていただいています。この『生きているだけで価値がある』という本は一万部ほど出

ていて、アマゾンでも買えるんですけども、印税を全額、東日本大震災の遺児、お母さんが妊婦で流されてしまった子どもたちなどに寄付させていただいています。今日の話を聞いて、もし読んでみたいなと思っていただいた方は、寄付金にもなるので、ぜひ、よろしくお願いします。今日は、私がどんな活動をしているか、何でボランティアなどをしようと思ったかを、順繰りにお話しさせていこうと思いますが、そちらにも書いてあるように、今は健康になったんですけれども、約十四年前、ちょうど娘が一歳ぐらいの時に子宮頸癌になって「生きるか死ぬか半々です」と言われました。そこからいろんなことがあって、今はシングルマザーになって、みなさんとほとんど歳が変わらない、当時一歳だった娘も十七歳になって、今はアメリカのカリフォルニアのサクラメントに高校生で留学をしています。私も高校の時に留学をしていました。ざっくりプロフィールはこんな感じですか。では、まず自分自身の人生を語らせていこうと思います。そこに、何で今こういう生き方をしているかのきっかけがいっぱいあります。

今日、こちらで講義をさせていただく前に、学長とお話をさせてもらいました。「インドでは、生きるうえでの哲学と宗教は同じ」ということを教えてもらいました。私自身もそれをすごく感じるんですね。とっても可愛らしい女子でも、中身がペラペラだと、年

齢を重ねるごとに薄っぺらくなってしまふんじゃないかと思うんです。私は、自分自身のいろんな経験のお陰で、いろんな書物を読んだり、いろんな人の話を聞いたりするんです。その学長の「インドでは、宗教と哲学が同じだって言ってるんだ」という言葉が、私の人生もまさに同じだなと思いました。私は、宗教はすごい遠い存在というよりも、生きていくうえでの哲学だと感じています。自分自身に何かあった時に、仏法の言葉を握りしめて、涙を流してはい上がってきました。私は日蓮の言葉が好きですが、いろんな言葉の中に「冬は必ず春となる」というのがあるんですね。癌になって生きるか死ぬかとか、離婚しちゃったり、無職になったり、「もうこんなの絶対に乗り越えられない」「このまま命が終わってしまうかもしれない」「この、寒い寒い冬、絶対に終わらへんわ」「いつまでたってもずっと冬やわ」って思う時期でも、春の来ない冬はないですよ。当たり前のことかもしれないけど、季節であったり、比喩であったり、仏法には生きる上で素敵なヒントがたくさん隠されているなと感じています。

幼少期の経験―春を待つ寒い冬の時期―

私の幼年期のお話をさせてもらうと、正直、あまりいい家庭環境ではありませんでした。今問題になっている、いわゆるDVの家庭環境です。父はちょっとしたこと、パチンとキレて、うわーっとお母さんに手をあげていました。お母さんは本当はとっても心が優しい人なんですけれども、暴力を振るわれて、だんだん病んできました。笑顔もなくなってきました。お母さんは二十二歳、ほぼみなさんと歳が変わらないくらいで私を生んだんです。鹿児島の本当にど田舎から大阪にやってきて、世の中のことも、恋愛のことも、何もわかってない中でポコッと私を生んだんですよ。だから、母親自身も、どうしていいかわからない。旦那さんの理解がなかったり、暴力を振るわれたり、という大変な状況で、どんどん笑顔がなくなっていました。それは心が病んでいたからです。普通のお母さんみたいに「あー、陽子。学校、今日どうだったの？」「一緒にお買い物行こうねー」って手をつないで一緒に歩いたり、ギューッと抱きしめてもらったり、そういう記憶がないんです。私の幼年期は、お父さんが、うわーっって、どやして、お母さんに暴力を

振るって、髪の毛を鷲掴みにしてずるずると引き戻して、私は五歳とか六歳で、ちっちゃいながらも体を張って「もう、おかあさんを、これいじょう、たたかんとって！」って覆い被さっているという、むちゃくちゃな状況でした。そうやってお母さんを守ったのに、お母さんは当たるところが私しかなかったんです。弟たちじゃなかったんですよ。だから、私の目を見て話せなくなっただけと同時に、唯一のスキシップは、本当はお母さんもそんなことはしたくなかったのに、自分自身の心が悲しくて、苦しくて、辛くて、涙を流しながら私に手をあげることもありました。時には着物のひもでくくりつけられて、夜中にトイレに行けなかったり、そんなこともありましたが、でも不思議と、子どもってお母さんのことを憎まないんですね。

このパンフレットに真ん中に児童養護施設の子どもたちが写っているんですけども、この子どもたちは、七〇八割ぐらいがDV、暴力を振るわれて、お父さん、お母さんが育てられなかったり、警察から保護されたりして、この施設に入っています。私は日本全国十ヶ所で（鈴木奈々ちゃんも東京の施設を訪問してくれています）、一緒にボランティアというより、一緒に遊んでもらっているというか、同じ一人の人間として、いろんな体験を話したり、涙を抱きしめたり、素晴らしい経験をさせてもらっています。そうやっ

てできるのは、ちっちゃい頃に、サザエさんとか、ちびまるこちゃんのような良いおうち
に育ってないからだと思います。だから、「温かい家庭に育ってない子はどんな気持ちな
んだろう」とって、自分の経験から身を持ってわかっているのです、具体的にどうい
うことを求めているのが何となくわかってきたんです。

お母さんから暴力を受けたり、「あんたなんか生まれて来なければよかったの」と言
われる状況では、子どもも暗くなるんです。なぜかというのと、「お母さんは太陽のよう
に笑っていてほしい」とって、私の尊敬する師匠も言っているんですけど、本当にその通りだ
と思います。お父さんに殴られようと、貧乏だろうと、病気だろうと、お母さんさえ笑っ
てたら、子どもは笑うんですよ。「何か大変そうやけど、お母さん笑ってるからいけるな、
大丈夫やな」とって思うんです。うちはそうじゃなかったから。お母さんがいつも泣いて、
いつも苦しんでいて、目も合わすことができなかったから、子ども自身が、全く同じよう
な感じに育ってしまうんです。そして、今私は、こんなにも前向きで明るいんですけど、
学校に行ったら、「暗いな」「気持ち悪いな」といじめられました。トイレに入ったらホ
ースで水かけられてね。先生が来るまでめっちゃくちゃ不安でした。私が泣くまで、みんな
に集団でいじめられていました。当時は「いじめ」がそんなに今ほど問題として取り上げ

てもらえなかったから、当たり前前のようにいじめがあつて、当たり前前のように私は登校拒否をしていました。家でもそんな状況、学校でも長期間いじめられて、私は赤いランドセルを背負った、ちっちゃいちっちゃい小学校低学年の時に、「この車にとびこんだら、友だち泣いてくれんのかなあ」とか、「おかあさん、私のこと、どういうふうに思ってくれるかなあ」とか、そんなことを考えてたんです。夜になったら眠れなくて、「また朝が来たらいじめられる」とか、「今日もお父さん帰ってきてないな」とか。今考えると、ちっちゃい子どもでも精神的な疾患になっていたんだなあと思います。その当時は本人にはわからないんですよ。

愛の三原則——「生命を大切にしましょう」を理解できる心を育てる——

日本全国、子どもから大人まで、約三万人の方たちが自ら命を絶つてるって聞いたことがありますか。これは、戦争が起こつて三万人が亡くなっているのと同じです。こんなに衣食住足りてるのに、毎年、毎年、三万人が亡くなっているんですよ、自分から。よく電車が止まつてるでしょ。本当にその人たちは死にたいって思つてるのかなつて。人は何のた

めに生まれて、どこに向かっているんだろうって。私はちっちゃい頃からそういつた経験を
してたので、同じように考えてました。お母さんには「生まれてくるべきじゃなかった」
って言われるし、学校では「気持ち悪い」「暗い」って言われるし、私に存在する価値が
あるのかなって。どこに行っても意味がないじゃない。何のために生まれてきたのって、
誰から私は愛されて、誰から私は必要とされるのって。みなさんもちっちゃい頃、きつと
「命を大切にしましょう」って学んだと思います。私も道徳の授業で学びました。活字で
「命を大切にしましょう」って言われても、ちっちゃい頃はわからなかった。命が大切な
なんて、みんなわかってますよ。みんな人を傷付けたくないのもわかってる。誰でも幸せに
なりたいたいと思ってる。じゃあ、それを具体的にどうしたらいいんだろうって。

私のうちには、ばあちゃんがおりました。私は結構ちっちゃい頃から我慢して弟たちの
面倒を見ていました。お父さん、お母さんも水商売で帰って来たり来なかつたりだったの
で、幼稚園ぐらいの時から、風呂入れて、寝かしつけて、朝はみそ汁作って、弟の弁当を
作って……って、ちっちゃいながらすごく頑張る子だったんですよ。でも、自分自身が本当
にダメだつていう時に、「ばあちゃん、もう学校行きたくない」「何ヶ月もずっと我慢して
た」「トイレで服もびちょびちょになったよ」って。そうしたらね、お母さんにも抱きし

めてもらったことがない私を、ばあちゃんが、うわーって泣いて、ぎゅーって抱きしめてくれたんです。「こんなに頑張りやさんの陽ちゃんが、こんなに泣いて学校に行けへんって言うのは、よっぽど辛かったんやなあ」って。ばあちゃんが泣きながら校長先生に電話をしてくれたんです。「うちの陽ちゃんは頑張りやさんや。どんなことがあっても涙を流さんと歯を食いしばって頑張る子や。なのに学校に行かれへんって言うてる」って。そのおかげでいじめもストンと終わってね。で、ばあちゃんがぎゅーと抱きしめながら言いました。「陽ちゃんはな、宇宙で一番の宝物なんやで」って。ばあちゃんも、めっちゃ仏法が大好きな人だったから。「仏法にも書いてある。どんな金銀財宝よりも、宇宙のほんまに高い宝物よりも、何よりも、人間ひとり、生き物ひとり、生きとし生けるものの命が、何よりも尊くて大切なんや」って。「陽ちゃんの命もそうや」って。「陽ちゃんは宇宙で一番大事やねん。だから、ばあちゃんは、あんたが苦しんで泣いてたら、ほんまに苦しい。宇宙で一番大事な子やから」って、ぎゅーと温かい手で抱きしめてもらって、同苦の心で涙してもらって、初めて、「これが、命を大切にしましょう」っていう意味なんやってわかりました。苦しんでいる人がいたら「いや、私関係ないから」って見て見ぬ振りをするんじゃないくて、同苦の涙を流して、生きている証ですやん、この温かい手って。死んで

しまつたら氷のように冷たくなるのに、この温かい手でぎゅーっと抱きしめたり、背中をさすってくれたりね、笑顔で見つめ合ったりね、これが、命を大切にするという表現なんだということ、私は幼い頃に身にしみて感じました。

私は本の中で、「愛の三原則」というものを書いていきます。何かわかりますか。まず一つは「愛情のこもった眼差し」です。今、スマートフォンがめっちゃ流行ってるじゃないですか。スマートフォン見ててホームから転げ落ちる人もいるくらいでしょ。道端歩いてたら、スマートフォン見ながらぶつかってきたり、自転車乗りながらスマートフォン見たりもありますよね。あれは本当に危険というか、危険と同時に心がありませんね。この箱の中にしか心がないんですよ。今日も、ぱつと見ると、すごい綺麗な秋の空があったり、めっちゃ綺麗なお花が咲いてたり、夕陽が輝いてたり、身近な友だちが一生懸命笑顔で話しかけてくれてるのに、「うん、わかった、わかった、うん」。もつたいない人生やなあつて思う。これね、今の母親に多い。将来、みなさんも母親になるかもしれないでしょ。おっぱいあげながらスマートフォンを触ってるお母さんとかいるらしいです。あれ、めちゃめちゃあかんらしいですよ。赤ちゃん見てください。おっぱい飲みながらお母さんの目見えますよ。「お母さん、今日どんなフィーリングなかなあ」「お母さん、機嫌悪いんかなあ

あ「お母さん、しんどそうやなあ」って赤ちゃんながらにすごい一生懸命見てるのに、お母さんちつとも見てないんです。アイコンタクトは動物でもやっています。人間ができてないのは本当に恥ずかしいなと思います。

そして二つ目が「愛情のこもった優しい肉声」。これは私が入院している時にめっちゃ思いました。私は京都新聞社の仕事で、京都の看護学校も三ヶ所行かせてもらって、これから看護師になりますよという方々に向けて、元患者として、自分が入院していてどういったことをして欲しかったか、こういうことが嬉しかった、ああいうことが嫌だったという講義をさせてもらっているんですけど、その時にもこの「愛の三原則」の話をしました。この「声」、「愛情のこもった肉声」。声ってめっちゃ敏感じゃないですか。文字ってすごくわかりづらい。LINEでも、ハートとかスタンプとか押してるけど、それでも活字より肉声を聞いたほうがわかりやすいですよ。肉声よりも実際に会って目を見てアイコンタクトが一番良いですけれども。入院してる時もすごい思いました。暗い看護師がやって来た時は、朝のスタートは気持ちめっちゃ暗いです。きつとみなさん、周りで、何かこの子魅力的やな、何かこの子ピカピカしてるよねって子は、たいてい、「おはよ」って言えへんと思う。何かこの子可愛いわって、何かいけてるわって子は「あ、おはようござい

ます〜」とか「おはよ〜」って絶対にやっつてると思っています。この肉声はめちゃめちゃ大事です。手術して、切って血まみれで大変な時、一日中、痛みと苦しみと、これ永遠に続くんちゃうかと思うくらいに苦しい時に、がらがらって扉を開けて、看護師さんに「松田さん、おはようございます」って優しい言葉をかけてもらうだけで、太陽が射したみたいに心がパツと明るくなるんです。「松田さん、おはようございます」やったら、ずっと痛いわ、ずっと苦しいわ、みたいになるんですよ（笑い）。「愛情のこもった肉声」覚えておいてくださいね。

三つ目は何でしょうか。わかる人、はい。わからないですよね。「スキンシップ」です。あ、書いてくれてんねや、ありがとう。嬉しいわ。愛の三原則ね。勤勉な方が多いですね。愛情のこもった眼差し、肉声、スキンシップです。さっきも言いましたよね、生きてる証、この温かいの。猫でも寒いときに寄り添って自分の体温で温めあつてるじゃないですか。私はアメリカの高校に行つたのでスキンシップとか大好きなんですよ。ハグもめっちゃ大好きで、私は関西外国語大学に行つていて、帰国子女の友だちが多かったので、「陽子、またな〜」ってみんな引くじゃないですか。でも、日本に住んでいる一般の人には基

本ハグです。親しくない人、初対面の人でもなるべく「ありがとうございました」「お久しぶりです」って握手したいんですよね。それでパツと変わるんです。

このコミュニケーション能力が高い子というのは、確実に就職できます。これは将来役に立ちます。何の仕事でも役立つ。私は自分自身が元癌患者だから、厚生労働省の仕事で「癌の検診に行きましょうね」って日本全国回らせてもらっていて、その中で素晴らしいお医者さんのお友だちができるんですけど、そのお医者さんに「松田陽子さん、お医者さんになるのに何が一番大事かわかりますか」「何の教科が得意だったらいと思いますか」って言われて、私は知らないから「数学ですか。理数系でしょ」って言ったたら、「違うねん、国語やで」って言うてました。「え、何ですか」「お医者さんで、コミュニケーション能力がない人はほんまあかん。相手がどんな気持ちになつていいのか、どんな症状でどことリンクしているのか、人に対する色んな観察がきちんとできないとわからないよ」って、理数系やと思うお医者さんでもそうなんやなと思いました。

愛の三原則。私は幼年期に泣き泣き経験したおかげで、身にしてみても、これほど大事なものはないなということがわかりました。そういう家庭環境に育つたので、自分自身は温かい家庭を築きたいって、きつと、みなさんもね、若い女子は思われると思います。素敵な

旦那さんと結婚して、幸せな家庭で過ごしたいなって。中には「私はキャリア志向やから結婚したくない」という人もいるかもしれないけど、私はそういう家庭環境だったから、家庭に対する願望が半端なかったんです。もちろん、夢もありました。『水野真紀の魔法のレストラン』って知ってますか。知ってる人、はーい。大きく手を挙げてください。知ってる人、はーい。あ、そんなにいないの？ 地方の方も多いからかな。グルメの番組で、「魔法のレストラン」ペタって貼ってあるところって、たいい美味しいよ、みたいな。その番組のエンディング・ソングも歌わせてもらっています。あと、カラオケ DAM とか JOYSOUND にも入ってるので、youtube を見て一回は流してください、お願いします。五円ぐらい印税入るんで（笑い）。

十六歳で語学留学―海外で出会った子どもたち―

私は、まあまあな歳になって夢を叶えさせてもらいました。ちっちゃい頃からどういう状況やったかを説明しますと、大変な家庭環境で、大変な登校拒否で、えらいこっちゃん「自分なんて何も意味ないやん」って思ってたんですけど、その中で一つだけ、「私はこの

ために生まれてきたんかな」って思ったことがあったんです。私のおばちゃん（お母さんの妹）が、ビクターからデビューしてたんですけど、それで、日本全国のお祭りとか、サンフラワーの船の中で、四、五歳のちっちゃい時に私は歌を歌わせてもらってたんです。そこで歌わせてもらっている時に、わーっと、すごいみんなが喜んでくれたんですね。学校でも目を合わせてくれへんでしょ、お母さんも目を合わせてくれへんかったでしょ。やのに、歌ってる時だけ、すごい嬉しそうに見てくれるんですよ。めっちゃ嬉しかった。初めて人と目が合ったという感じでした。「私はこのために生まれてきたのかもしれない」って、ちっちゃい体で本気で思いました。それで、小学校五年生ぐらいの時にオーディションを受けて、まあまあ大きいプロダクションに受かったんです。受かったんですけど、ちようどその時に両親が離婚して、お母さんが弟も含めて兄弟三人みんな抱えてシングルマザーになっちゃったんです。水商売で一生懸命仕事をして働いてくれて。だから、私は歌手なんて夢見る子ちゃんみたいなことを言ったらあかんって、弟やお母さんを食べさせるために食いつぶぐれのない語学に行こうと思ったんです。

娘がみなさんと変わらないくらいやから、私がいいたい何歳かわかると思いますが、一生懸命若作りして頑張ってるんですけど、今、四十六歳になりました。若い？ ありが

とう。もっと「ええー」とか言っているんで（笑い）。言ってみる？　もう一回言うよ。言つてよ、大きい声でな。若作りしてるんですけれども、私は今年で四十六歳になりました。ええー、あれ？（笑い）。あれ、恥ずかしいな。ま、いいや（笑い）。講演会なんかでは、みんな「ええー」って言つてくれんねんけど、恥ずかしい年頃やもんね。うん、わかるよ。うちの娘もきつと言えへんかったと思う。

当時、三十年ぐらい前つて、語学留学とかつてそんなに行つてなかつたんですね。でも、私はその時から「世界や」と思つてました。みなさんには「世界つて素晴らしいですね」つて言ってもらえるんですけど、実は、家庭環境があまり良くなかつたから早く家を出たかつた、それだけなんです。家出てヤンキーになるか、世界で勉強するか、二者択一だつたんですよ（笑い）。で、ヤンキーとか暴走族よりは世界の方がいいかなと思つて、十六歳の時に行つたんです。今の娘と一緒にです。高校二年生の時に行きました。で、世界に行つたらいろんなことにビックリしましたね。今は留学する子が少なくなつたつて聞きますけど、旅行でもいいから大いに行つてください。気を付けながら行つてください。世界はやっぱすごい広いですよ。日本で当たり前だと思つてることが全然当たり前じゃない。私は約四十ヶ国ぐらいリユックサックで旅をさせてもらいました。

もちろん、ヨーロッパとか、ハワイとか、素敵なりリゾート地も行きましたが、自分の人生を二十代の時に大きく変えた国がありました。それはインドの下のスリランカという国です。今はだいぶ落ち着いてる状況、かな？ 私が行った当時から国内紛争が半端なくて政治が止まっている状況でした。スラム街を歩いていると（一人で行ったら危険ですから行かんといってくださいよ。私もちゃんとスリランカの案内人の友だちに連れて行ってもらったんです）、子どもたちが、台の上、汚いゴザの上、土の上に並べられていました。で、「陽子、ぜったいにお金を入れたらあかんぞ」って言われたんです。「わかった」って見んこうと思つて、バーツと駆け足で行ったんですけどね、パツと見てしまったんです。そしたら四十度以上の灼熱の中、ボロボロの布をまとつてる子、裸の子、よく見たら手がないんですよ。足がないんです。「えらい、スリランカの子ってハンディキャップ持つてる子が多いねんなあ」って。そしたら「違うよ」って言われたんです。「どういうこと？」って聞いたら、スリランカは、国内紛争でずつと政治が動いてなくて、民衆がすごく苦しんでね、子どもたちを目の前にして「お金をください」って言っても旅行者は入れてくれへんから、悪い組織や親が、生まれたての赤ちゃんの手を切つて、足を切つて、並べてるんですと。五体満足で生まれてきた子が、一生懸命、ない手を伸ばして“Please

give me money!”、僕の弟は一週間食べてないんです、ご飯ください、死にそうなんです、ガリガリなんです、お願いします、って訴えてるんです。自分のためだけじゃないんですよ。自分よりちっちゃい弟や妹のために、灼熱の中、一生懸命訴えてるんです。

そして、私たちみたいに、蛇口をひねって水も飲めません。外を歩いていたら地雷が埋まっていて、すぐに足が飛んだり、命がなくなったりします。もちろん、暖かいお布団で寝れません。当たり前のように、みなさんみたいに鉛筆もありません。教科書もないです。「勉強イヤやな」って思ってるかもしれないけど、学校に行けない子たちもいっぱいいます。ほとんどの子どもたちがちっちゃい頃に水くみに行かされます。何キロも離れた所にね。ちっちゃな、ちっちゃな子が。お米の一〇キロ担いだことある？ 一〇キロ持つて歩くの相当しんどいよ。ちっちゃい子が毎日一〇キロ近くのお水を汲みに行ってる。途中で地雷が埋まつてるかもしれない。途中で撃たれて死んじゃうかもしれない。辿り着いた所も日本で見えるような川ちゃいますよ。京都のきれいな川ちゃいますよ。沼ですわ。泥沼です。垢がいっぱい浮いてるところを、よそに避けて、どろどろの泥水みたいなのを掬って運ぶんです。女の子たちは頭を剃ってます。何でかわかりますか。ちっちゃい女の子でも平気でレイプされるからです。そんな状況を毎日、毎日、生きているんだということ

を、私は、みなさんと歳が変わらないくらいの時に目の当たりにしました。

ニューヨークへ―挫折の先に見出した道―

この子たちは何のために生まれて、どこに向かっているんやろう。私は何のために生まれたん。何になるの。何で生きてんの。みんなは、じゃあ、どうなん。その疑問がずっと自分の人生に付きまといました。その時、国連の職員になりたいと思いました。歌の夢は諦めてたんでね、食いつぶぐれのない語学に行って、語学を使って、国連の職員になるためには三方国語ぐらいしゃべれなきゃいけないと、みなさんぐらいの時から外務省に問い合わせ調べてました。日本語、英語、次は何でしょう。ちようどカリフォルニアにいたときにメキシコ人の友だちがいつぱいいて、スペイン語をしゃべってたんですよ。ラテン系のノリが好きで、心温かい友だちがいつぱいできたから、「次はスペイン語やな」って思って、関西外国語大学でスペイン語を学びました。私は思ったらすぐ行動してしまうので、スペインの南の方、アフリカ大陸の左横にあるカナリア諸島に行きました。ウインドサーフィン（帆が付いてるサーフィンです、もし良かったら体験してみてください）のワ

ールドカップをやつてるところです。ウィンドサーフィンもしたい、スペイン語もバリバリしゃべれるようになりたい、というのでカナリア諸島を選び、二十一歳の時に語学留学をしました。そして、日本語、英語、スペイン語をマスターして、「おっしや、国連の試験受けよう」「世界平和のために自分の命を使いたい」って試験を受けようと思つたら、何と、「体育大学、音楽大学、外国語大学除く」って書いてあつたんですよ。また、私の夢は破れてしまいました。若い頃はことごとく夢が叶わない人生だったんです。

夢破れて「どうしよう。でも私は世界平和に携わりたい」ってずっと思つてるので、「世界のこの情勢を発信していきたい」と、アナウンサー、報道とかね、そっち系に行こうって思いました。日本全国いろんな所を受けて、静岡放送も、まあまあ良いところ受かりましたし、MBSの三〇〇〇人の最後の六人ぐらいまでも受かりましたし、四国も受かりましたし、めっちゃ全国受かりまくるんですけど、アナウンサーの最後の一人に選ばれないんです。これは本当に屈辱的でした。何で私はこんなにも夢が叶わへんねやろう。何で受からないんだと。今、振り返ると理由がわかるんです。役員の人に本音で言われたのは、「君は、めっちゃくっちゃ取りたい。絶対のうち欲しい」みなさん言われるんですよ。「でも、君は、会社の歯車の一つとして動けないと思う」って（笑い）。きつと、二年間、

一生懸命局アナで養成して、さ、テレビに出るってなったとたん、独立して東京とか行きそうやと。「じゃあ、あなたは静岡放送に受かったからって、静岡の人と結婚してここに住むか?」「おるか、ずっと。おらんやろ?」って言われたんです(笑い)。年配の人は見破ってるなって思いましたね。その通りに思ってたんですよ。

で、結局、局アナの夢も破れて、最終的に「どないしたらええねん」って思ってる時に、偶然、たまたま、歌でスカウトしてもらうんです。私は夢なんかばっさり捨てて、歌の道なんて絶対に行かへんと思ってたのにな。そして歌の道に行くことになり、ミュージカルのイベント会社で、神戸のハーバーランドとか、いろんなところで歌わせてもらいました。そして、その会社を辞めてニューヨークへ渡りました。ニューヨークでジャズシンガーになるって決めて行きました。これは別につてがあるとか、ジャズシンガーになれるかって、何も保証はなかったです。みなさんぐらいの歳でした。何で行ったか。行きたかったからです。最近の子は、夢をあまり持つてへんとか聞くんですよ。うちの娘は夢がめちゃくちゃあるんですよ。だから私はよくわからないんです。正直、みんなよりもっと夢持つてるかもしれへん。で、今までに夢を一〇〇個ぐらい叶えています。四十六歳ですけど、夢を叶え続けてます。夢を持つてる人、自分の目標を具体的にしっかりと明確に持

つてる人は、環境に関係なく、年齢に関係なく、コネあるなしに関係なく、一つ、一つ、ちゃんと実現できるんです。

「私はニューヨークに行つてジャズシンガーになる」「知り合いおんの?」「誰もおらん」「お金あんの?」「所持金、二十何万」。パーンと行つて、一泊千円のユースホテル、二段ベッドで男も女も雑魚寝、ごちゃ混ぜ。すぐパスポートを取られるから腹巻きをずっと着けてました。腹巻きに、パスポートとか、現金、カードを入れて寝てました。そこに行つて、住むところも探して。マンハッタンは住むところが高いから、ほんまに泣きましたよ。月三〇〇ドル、四〇〇ドル、三万、四万とか、当時ね。「マンハッタンでこんなに良い条件? 三万、四万? めっちゃええやん」つて行つたんですよ。そしたら、めちゃくちゃ狭い、六畳ぐらいの部屋に中近東の男の人がベッド一個置いてはるんですよ。で、これぐらいの幅があつて、この横にベッドがあるんですよ。ようは六畳一間に、ベッド二個置いてあるんです。わかります? 見ず知らずのおっさんと、こっち私。三〇〇ドル。住みませんよね(笑)。そんなんとかね、四〇〇ドルつていうのがあつて見に行つたら、部屋はありました。今度は女の子でした。よかつた、よかつたつて、「私が住むところ、どこですか?」つて言つたら「ここ」つて、めっちゃ狭いこれぐらいの押入れでした。ほん

まビツクリする。経験してみなわからへんね。日本の常識と海外の常識が全く違う。今やったらギャグで笑えるけど、その押入れを見た時とか、知らんおっさんをベッドを並べるところに入った時は、帰りに泣きましたよ。そんなでした。

それで、次は就職です。一流のところ就職しようって、バイトしようって、マンハッタンの高級クラブで働きました。そこには、久保田利伸さんとか、アルフィーとか、みなさんは「誰やねんそれ」って思われるかもしれないけど、私たち世代の先生方は「ええ」ってね。蒼々たる企業さんとかもゴロゴロいるような所で、ドレスを着て、パーメイドって、バーテンダーのメイドをして、一生懸命バイトをしていました。そのバイトと、ボイストレーニングをして、ウロウロしている時に、ある日、地下鉄で楽器を持つてるおっちゃんの話しかけてくれました。“Are you Japanese?” “Yes”、何しに来たの? って。シンガーになりきたの? じゃあ、おっちゃんここに歌いに来るか? って。歌う、歌う! って。どこのおっちゃんかわからへんけど、とりあえず、おっちゃんの音楽の職場についていったんですよ。そしたら、ブロードウェイのマリオットホテル。よく、ニューヨークって言ったらビルがバーンって映るでしょ。そのマリオットホテルの音楽プロデューサーやっただです。で、いきなり夢叶って、ブロードウェイのマリオットホテルで毎週末、ジ

ヤズを歌うことになりました。

夢叶うなって、めっちゃ波瀾万丈でいろんなことあるけど、絶対に自分が、これはやる、これはやりとげる、どんなことがあってもやってみせるんやって行動してたら、夢を語りまくってたら、こういう引き寄せがあるんやなっていうことは、今まで何十個とありました。「どうせ、叶わへんわ」じゃなくて、口に出して大いに言ってくください。馬鹿にされてもいいですよん。「そんな無理やわ」って言われてもいいですよん。言いまくってください。そして、そういう人たちに話を聞くとか、関係の映画を観るとか、雑誌を見るとか、ネットを調べるとか、何でもいいです、全て出会いですから。自分のアンテナが錆び錆びやったら何も引つかからへん。でも、ガンガンにアンテナが伸びとってピカピカやったら、ピターって、ホコリでも付くわ。何でも吸い寄せてください。

出産そして、子宮頸ガン——幸福からどん底へ——

そうやってニューヨークと日本を行き来している中で、私は結婚するんですね。「私は絶対に国際結婚やわ」って思ってたんですけど、自分の駅の隣の隣、東三国の人と結婚し

ました。そして、先ほども言いましたけど、歌手になる夢は自己実現できたけど、私自身が憧れるのはやっぱり家庭でね。良い奥さんになろうって、良いお母さんになろうって思いました。お金持ちではなかったですけど、すごい幸せでした。娘が生まれた時ね、私はどっちかと言うと、子どもがあんまり好きじゃなかったんですよ。うるさいでしょ、大変でしょ。でも、わが子が生まれたらガラッと変わりましたね。子ども嫌いやわって言うてる人ほど変わるんですって。母性本能がぶわーっと溢れ出て、今までなかったんかっというぐらいに溢れ出て。逆に「子ども好きやねん」って言ってる子ほど、わが子を淡々と育ててますわ（笑い）、私の周りにはね。子ども嫌いやって言うてる人ほど変わりますよね。子どもが、可愛くて、可愛くてしょうがない、ほんまに。二十四時間、おしめ変えなあかんでしょ、おっぱいあげなあかんでしょ、ちよこちよこちよこちよこ起きるでしょ、ほんまに肩凝って、サロンパス貼って、手も腱鞘炎でこもサロンパス貼って、腰にもサロンパス貼って、サロンパスまみれ。まあ、ほんまに大変やねん、お母さんって。やけど、可愛くて、可愛くてしょうがなくて。自分の体に赤ちゃんが密着するのが、本当に愛おしくて、匂いも全て愛おしくて、トイレ行く時も、こうやって、こうやって、トイレしてたもん。何でこんなに可愛いんやろうなっというぐらいに可愛かったです。その時に思ったんです

よ。私のお母さんも、きつと私のことをこんなにも可愛かったに違いないあつて。やのに、「あんたなんて生まれてこーへんほうが良かったわ」「あんたなんかお父さんに似てるんやわ」って、泣きながら手をあげてしまった。よっぽど心が辛かったんやなあつて思いました。自分に娘が生まれて、こんなにも愛おしい存在が、命があるのに、この愛おしいものを、愛おしい命を、離ればなれで施設に預けてしまうことは、よっぽど辛いんやろうなつて思ったんです。よく児童虐待で「子どもが可哀想」って言いますよね。もちろん、子どもは可哀想ですよ。私もめっちゃ殴られてましたからわかります。でもね、手をあげてるお母さんはもつと辛いんやで。それは私も自分が経験してすごく思う。誰もそんなことしたくない。こんなにも愛おしいわが子を誰も叩きたくない。傷付けたくない。めっちゃ可愛いもん。大事な命やもん。お腹の中に入つとつた。へその緒で繋がつてたんやもん。したくない。それをしてしまつて本当に壊れてる。自分自身が苦しくて助けてほしい。私、生きるのが辛い。誰か私を助けてほしい。言えずに、苦しくて、わーつと大きい声を上げて、涙を流して手をあげてしまふんだなと思いました。

そんな可愛い、可愛い娘が生まれて、私はこの幸せが永遠に続くと思つていました。娘が一歳ぐらいの時にベビーカーを押して、ふと、みなさんもひよつとしたらそうかもしれ

ません、「私自分で生きてるし。親関係ないし。私の命やし」。私も若い頃そう思ってたんです。むしろ、弟の面倒を見たりとか、母親の代わりをやってたじゃないですか。だから、ますます小生意気な人でした。「私、自分で夢を叶えて、自分で生きてますから」「弟の面倒も見てますから」って。でも娘が生まれたと同時に身にしてみても、ちゃうかってんなあって。お母さんが抱きしめて、愛情、温もりで育ててくれたから、こうやって生きてるんやなって。

で、娘のために私は健康で長生きしたいなって思って、検診に行っただけですよ。これはみなさんにも関わることやから、よく聞いてね。私が罹った子宮頸ガンは、五十代、六十代、七十代のご年輩の方が罹るガンと違いますからね。二十歳でなる子もおる。二十代、三十代で一番罹るガンが子宮頸癌です。私は三十一歳でなりました。この子宮頸ガンは、たった一回でも性交渉をしたことがある人は、子宮頸ガンになる確率が一生のうちで八割以上です。「いや、いや、私この一、二年してないから」とかそんな関係ないですよ。十年間、このヒトパピローマウイルスは残りますからね。そして、私もそうやったけど、全然自覚症状がないんです。出血してます、お腹痛いです、腰痛いです、ないですからね。だから、毎年、あるいは一年に一回行くのが辛いんやったら、二年に一回は必ず行っ

てください。将来、赤ちゃんを生みたい、自分の命を落としたりと思われてる方は行ってください。私はこの子宮頸ガンを検診で見つけました。たまたま、偶然。そして気づいた時には、「これは子宮全摘やな。肺も肝臓も転移して、ガンが大きいから命がないかもしれないな」って言われました。すぐ三週間後に手術をし、あんなに愛おしい、愛おしい、ずっとべったり一緒にいれると思った娘を、ばあちゃんここに預けなあかんかった。しかも、「生きれる確率が半々ですかね」って言われました。こんなに可愛い娘が生まれて、私は一生健康で、娘の幼稚園の制服姿、赤いランドセルを背負う姿を見れるやろうなと思ってたのに、「あなたは命が半々ですよ」って言われたんです。心が張り裂けそうでした。この子のために絶対に生きたいなって思いました。

手術の内容を敢えて話させてもらいます。それは、みなさんに、本気で、ちゃんと、子宮頸ガンの検診に行ってもらいたいからです。私は四時間半の手術でした。全身麻酔で管を通してます。その管をごぼごぼと抜いたと同時に内臓がぐわーっと抉り取られたぐらい苦しくて目が覚めました。パッと起きたら、手からは痛み止めの管、鼻からは酸素の管、反対の腕からも痛み止めの管。毎年、一万五〇〇〇人の女子が子宮頸ガンに罹ってます。一万五〇〇〇人、毎年ですからね。約三五〇〇人から四〇〇〇人の、みなさんくらい

のお若い二十代、三十代、四十代の女性が命を落としています。毎年、約四〇〇〇人で。私がすごい恵まれてたのは、娘を一人生ませてもらった後で子宮を取ったことです。私は茨木市の追手門高校に行ってたんですけど、一緒に電車に乗って帰ってた、同じ「ようこ」という名前の友だちが、同じ時期に子宮頸ガンの手術をして、彼女は亡くなりました。私は奇跡的に生きてますけど。高校を卒業して再会したのは、冷たくなった彼女。お葬式でした。全然、当たり前前の命じゃないなど、次は私の番やなど思いました。

子宮を取って、リンパを取って、股からはおしっこ管、そして臓器を取ったからね、その血液を抜く管、もう管まみれ。お腹も何十センチもバツサリ切りました。夜中中、ずっと、ウーッて声が勝手に出てました。人ってほんまに痛い時には「痛い」って言われへんねんなって知りました。そして、この地獄が、ここが一番どん底なんやって思ってた。

私は何のために生きてるの？——原点回帰——

でも、ガンという病は切ったら終わりではなかったです。どんどん、地獄に落ちまし

た。それは、精神的な病でした。私はもともと、自分で言うのも何やけど明るい嫁さんでした。職人さんの旦那さんで、朝五時に起きて、弁当を作って「いってらっしゃい」って。帰ってきたら「足、マッサージしたるか」って。床の職人で足がパンパンやったからね。「辛かったな、よう頑張ったな」って足をマッサージして、めっちゃ一生懸命頑張つて、良い奥さんになろう、良いお母さんになろうって、すごく幸せな家庭でした。それが、ガンという病になってから、本当に音を立てて崩れていきました。旦那さんと言い合いになることもありました。それはなぜか。それは自分の苦しみしかわかってなかったから。生きるか死ぬかって、「二週間、三週間後に来てください。精密検査、MRI:」また今度命を落とすかもしれない、また娘と会えなくなるかもしれない、私が死んだらこの子は一体誰が育てんねやろ、って思ってる。そんな中、どんな精神的にも情緒不安定になりました。旦那さんとすれ違って、最終的には離婚してしまいました。

私は、自分の親が離婚しとったから絶対に離婚したくなかったんですよ。何が何でも、娘を幸せな家庭で育ててみせるって思ってたんです。なのに、ガンになった後、離婚してしまつて、心がパキンと折れて、寝たきりのひどいうつ病、精神疾患になりました。電車に乗ったらパニック障害で、過呼吸になって震えて、一瞬で汗びっちょりになって。「こ

ここで倒れたらこの人頭おかしいと思われる」ってポロポロ涙を流しながら、普通のふりして立ってました。世の中にはきつと、一生懸命、普通のふりをして生きている人がいっぱいいると思う。私はそうやった。ご飯を食べようと思っても食欲がなくて、味覚障害で、口の中に食べ物を入れたら砂の味がしたんです。昼も夜もわからへんくて、精神安定剤、睡眠薬、抗うつ剤を飲んでました。離婚した時、娘は三歳で、私が寝たきりになっているところに、とことこって、ちっちゃい体でやってきて、「ママ、お腹すいた」って。「ママ、起きられへんからな、机の上のパン届くか?」「うん」娘が一生懸命、椅子によじ登って、机によじ登って、スティックパンを取り出して、かじってました。「もう、この子と死んだ方がいいんじゃないか」「生きてて何かがあるの」「私は何のためにガンで助かったの」「私の命って一体何やの」。ちっちゃい頃から、そして、スリランカのスラム街の子ども達を見た時から、そして、ガンで生きるか死ぬかで寝たきりになった時から、「私は何のために生きてるの」「人間は何のために生きてるの」。

その、どん底から私がい上がってこれたのは、たった一人の友人がきっかけでした。その友人は大阪にいたんですけど、東京まで、新幹線代がないからバスで、八時間、十時間、揺られて私の所にやってきてくれました。ガリガリになって、やせ細って、よく映画

であるじゃないですか、寝たきりになつて天井をずっと見て口開いてる人、精神疾患のドラマとかで。私はあんなんでした。「陽ちゃん、陽ちゃんはガンに負けて、離婚に負けて、無職に負けて、貧乏に負けて、こんなに苦しむために生まれてきたんじゃないよ」「陽ちゃんは、必ず、全部乗り越えて幸せになるために生まれてきたんじゃないよ」「人には必ず使命というもんがあるんねん」「今は寝たきりで、ガン患者で病气やけど、陽ちゃんには、陽ちゃんにしかできひん使命があるんやで」って、その子もとっても仏法が好きで勉強したから、そう言つてました。自他共の幸福やつて。人は、自分ばかりが幸せになるために生まれてきたんでもない、自分の周り、家族、友だちが泣いと思ったら背中をさする。「どないしたんや、一緒に歩こう」って励まして、共に幸福になるために生まれてきたんやって。「使命を持つて、幸せになるために生まれてきたんやって」その子もそうやつて仏法を語つてました。その時、私は仏法に全然興味なかつたです。生きるうえでどの哲学って何やと。何のために、こんなポロポロで生きてんねやと。でも、ゆみのその言葉がきつかけで、何となく「ゆみちゃんがそう言うんやったら、もうちよつと頑張つて生きてみようかな」って少し勇気を与えてもらつたんです。

そして、ゆみと、寝たり起きたりで、夢も何も、職業も、元々、歌を歌うしかなかつた

から、アルバイト情報でいろいろ調べても、パソコンも触られへん、資格もない。結局、歌とか司会とか、大学を卒業してからマイクを持ってしゃべる仕事しかしてなかったんですよ。全然仕事なんてなかったです。「ただでもやらせてください」「何でもやらせてください」「通訳もできます、英語もちよつとしゃべれます」って。まあまあ歳もいつてたから事務所も入れへんかったから、全部一人で仕事を取ってきました。「陽子ちゃん、頑張ってるから、ここで司会し」って。今は娘を留学にやるぐらい細々と食べれてますけど、ほんまに仕事がなかったです。その寝たり起きたりの状況から、自他共の幸福やなくて。自分がやり残したこと。スリランカで会った子どもたち。

結婚してた時の「自分の家庭だけが、良き妻として、旦那だけが、娘だけが、細々と幸せだったらええやん」が全部なくなって原点に戻らせてもらいました。「お金も何もない、命もないかもしれへん。じゃあ、私は自分の命を、自分のためだけじゃなくて、誰かのために、何かのために、この命が終わるギリギリまで生ききったんねん」って。それがこのNPOです。年が明けて十二年経ちます。いろいろな企業さん、HIS有名な旅行会社さんから、鈴木奈々ちゃんから、山本リンダさんから、たくさんの人にボランティアで手伝っていただいて、そして、十二月一日にもまたイベントがあります。私の母校なんですけ

ど関西外国語大学の子も手伝ってくれたりしています。もし、「私、ボランティアに興味があります」「ぜひ、お手伝いさせてもらいたいです」っていう方がいたら、金曜日の夜にあるので、後ほど私に話しかけてください。

挑戦し続けて、笑顔振りまいて―自他共の幸福を追い求めて―

私は、自分の命を誰かのために、何かのために使っていこうと、そして今は、国連 UNHCR 協会、難民機関なんでも、その広報委員をさせていただいたり、児童養護施設、沖縄の石垣島にも寄付を届けています。群馬県、仙台、兵庫県、大阪、京都…、この前は京都の七ヶ所の児童養護施設の子どもたちに、一〇〇〇個のお菓子をあげてきました。一〇〇〇個ですよ、超喜んでました。いっぱい、たくさん、まだまだ、しなきゃいけないことがあります。四十六歳になろうと、きつと五十歳になろうと、七十歳になろうと、私は生涯青春です。自分自身が「もう歳やねん」「貧乏やねん」「忙しいねん」って言うとなら何もできひん。何で私はニューヨークで夢が叶えることができたか。お金ない、コネない、何もなし、こんなんやからアカン…、できないことを全部並べ

とつたら、きつと歌ってなかったと思う。でも、できない理由を数えるんじゃない、夢が「私、したいんや」この心一つで、自分の生き方が変わり、環境も変わり、私自身、夢が叶うと信じています。

最後に、私のとっても大好きな仏法の言葉でしめくくらせていただきます。

人のために火を灯せば 我が前 明らかなるかごとし

これは、まさに私の人生だと思います。児童養護施設の子どもたち、ポロポロ涙を流してね、「辛い」って言う人もいっぱいいます。「わかんて。私もそうやったで」「でも、お母さんはほんまにあんたに手をあげたくなかったんや」「ほんまはあんたを抱きしめたかったんや、お母さんは心が壊れてただけやで」「幸せになつて、「お母さん生んでくれてありがとう」って言いに行こうや。「お母さん、夢いっぱい叶えたで。めっちゃ素晴らしい人生や」って言いにくいこうや。子どもらに火を灯して、国連の難民、世界平和のために火を灯して、泣いてる友だちに火を灯して、抱きしめて、気づけば我が前、希望の光に満ちあふれる人生になってました。まさに、「人のために火を灯せば 我が前 明らかなるかごとし」の人生です。

自他共の幸福。みなさんは、みなさんの答えを探し求めてください。人は何のために生

まれて、どこに向かつてるんですか。何のために生き続けてるんですか。人は幸せになるために生まれてきた。自分だけではなく周りの人を幸せにするために。そして、夢を叶えるために。その人しかできない使命が必ずある。私は、いろんな経験をさせてもらいました。ガン患者にもなったし、今日は時間が来たのでやめますが、三、四年前に脳腫瘍で大阪病院でも手術して、目が見えへんくなることもあったし、難病になる時もあったし、いわゆる生老病死、全て経験させてもらってます。でも、本当に思います。私の人生に何一つ無駄なものはないです。みなさんはまだ二十年ぐらいしか生きてないけど、人生を振り返ってみて、無駄なことは一つもないと思います。もし「いや、いや、あれは無駄やったで」って思うことがあるならば、必ずそれがわかる時が来ます。やり残したこと、諦めた夢、叶えてください。突き進んでください。いつ、自分の人生が終わっても、「私の人生、挑戦し続けて、笑顔振りまいて、めっちゃ最高やったよ」そういう生き方を、ぜひ、していただきたいと、みなさんは娘と同じぐらいの年なんで、お母さんのにも思います。

以上です。本日はどうもありがとうございました。

って、そうであればあるほど、「人のため」という心ばせを、われわれは建学の精神から学んでいるはずですから、先生のお話を聞いて、一層、心強く思った次第でございます。どうもありがとうございました。

松田…ありがとうございます。私もこれから全力で頑張っていくので、夢をいっぱい叶えていくので、みなさんも Youtube でチェックしてくださいね、「松田陽子先生、頑張ってるなあ」って。宣伝よろしく願います。

学長…では、最後にもう一度、御礼の温かい拍手をお願いします。

松田…ありがとうございます。今日は Facebook、Twitter、いっぱいあげますので見てください。ありがとうございました。

——二〇一七年一月二四日——